平成25／26年度　第3期札幌文化芸術円卓会議　報告書（案）

「創造都市さっぽろ」の実質化
―発見・驚き・泣き・笑いにみちた日常をアートとともに―

はじめに

私たち第3期札幌文化芸術円卓会議のメンバーは約2年かけて、この札幌における文化芸術の、長期的・中期的・短期的に取り組むべき課題について、熱心に議論を重ねてきました。その根底にあったのは、今以上に豊かな札幌の文化芸術の環境のなかで暮らすことの誇りと喜びを、市民みなで分かち合いたいという思いでした。直ちに着手できるような事柄から夢のようなプランに至るまで、さまざまなアイデアが出されました。ただその実現には、幾多の現実的困難が立ち塞がることでしょう。しかし私たちは単に議論のための議論をしていたわけではありません。この報告書に記された、私たち第3期円卓会議のメッセージが多くの人に届き、共感を呼び、そしてやがて実現することを強く願っています。そのために、札幌市にご努力いただくことはもちろんのこと、私たち自身、今回の任を終えた後も、一市民として札幌の文化芸術を支える努力を続ける所存です。

1.　議論の前提

私たち第3期札幌文化芸術円卓会議以前にも、札幌市ではこれまで2期4年にわたって文化芸術円卓会議を開催してきました。

第1期円卓会議の提言は、「アーティスト−市民（企業等を含む）−市役所」の三者を「芸術の産業化」によってそれら相互の関係性を構築する、という内容でした。それに対して、三者の機能を固定化してしまう危惧はないか、「産業化」という概念が芸術に果たしてふさわしいか、といった意見が出されました。しかし逆にいれば、私たちは日常的に誰でも芸術に接していることに気づいていないだけで、「産業化」とは芸術なしには生活そのものが成り立たないことを示しているのだとも考えられます。

第2期円卓会議は、そのような芸術の産業化＝日常化を推進し、札幌における将来の芸術の拠点になるであろう「アーツセンター」について、その基本的理念と機能を集中的に論じるものでした。現在、札幌市では平成30年度に完成が予定されている市民交流複合施設とともに、そのようなアートセンターの実現を目指しているとのことですが、これだけ具体的な提言がされているのであれば、ハードの整備を待たずとも、ソフト的にできることからアートセンターを運用してはどうか、という意見が多く出されました。

こうした提言や、平成21年度に策定された札幌市文化芸術基本計画の見直しに向けた議論を踏まえ、さらに近年の札幌市における芸術文化の動向、とりわけユネスコ創造都市ネットワークへの加盟と札幌国際芸術祭SAIF2014の開催、あるいは近い将来の上記の市民交流複合施設とアートセンターの設置の実現などを見据えて、第3期札幌文化芸術円卓会議は、しかし必ずしも、それらにとらわれることなく、現在、また将来に向けて札幌市が抱えている文化芸術に関して取り上げるべき論点を、まずは網羅的に洗い出す作業を行いました（資料1）。それは大きく以下

の 4 つにカテゴライズすることができます。すなわち「文化芸術施設の整備」「文化芸術人材の育成」「ホームページ等情報発信方法の改善」「文化芸術を活かした事業の展開」ですが、その詳細は具体的なものから抽象的なものまで、実にさまざまなアイデアの宝庫であり、すべてを実現することはできないかもしれませんが、札幌市におかれましては、機会あるごとにその実現可能性を追求してもらいたいと思っています。

このような検討を経た結果気づかされたことは、そうした多様な関心の中心にあるのは、**市民生活にどのようにすれば芸術文化を浸透させることができるか**、という問題でした。これは第１期円卓会議の提言、「芸術の産業化」とは逆の「産業の芸術化」あるいは「**日常性の芸術化**」とでもいうべき立場です。**それは単に新しい芸術産業の創出・育成にとどまることでも、また産業活動や経済活動のみに関わることでもありません。そうではなく、文化芸術は教育活動や社会活動、文化的活動、また家庭や地域社会、職場などでの市民生活、さらに地球規模での社会変動や環境問題など、私たちの日常性のあらゆる場に芸術が関係している、いや積極的に関与してゆく必要性、必然性があるということです。「創造都市さっぽろ」の謳う「創造性」の理念もここへと帰着するのでなければならないと考えます。**

2.　芸術（アート）について

しかしこうした「日常性の芸術化」を目指すとしても、「芸術（アート）」といい「創造性（クリエイティビティ・アイデア）」といい、多くの市民にとってはそれを自らのものとして実感することが稀です。アートも創造性も、どこかよそよそしく、敷居が高く、自分の生活とは無関係のところで行われている出来事のように感じています。アートや創造性は、私たち誰もが備えている基本的能力であること、生活しているあらゆる場所に存在していること、そうしたことにどうすれば気づくことができるのでしょうか。

試みにアートのない社会を想像してみましょう。それは単に絵画や音楽がないというだけではありません。私たちは着るものに気をつかわなくなるでしょう。食べるものも栄養価さえとれていれば何でも構いません。住まいも寝場所さえあれば事足ります。つまり衣・食・住のあらゆることに無頓着となり、豊かさは失われ、やがて私たちの生活は混乱し、社会は崩壊してしまいます。なぜなら、一枚の衣服にも、それをデザインした人の想いがこもっているからです。ああ、この料理は美味しいなと感じる味覚こそが美しいものに対する判断の根源だからです。また住まうこと自体が、古今東西、総合的な芸術の結晶に他なりませんでした。したがって、もしも**アートが失われてしまえば、私たちの生活、生命、ライフそのものが成立しない**のです。

このように、本来は私たちの生活と密着している芸術を、近代の歴史は、美術館やコンサートホールといった「芸術の殿堂」の中に押し込めてしまいました。またそれを良しとして受け入れてしまった芸術の側にも責任があります。しかし芸術と生活との離反の傾向が強まれば強まるほど、逆に両者の絆を取り戻そうとする動きも強まります。札幌市は既に半世紀前に制定した札幌市民憲章の中で、「北国のくらしにあった、衣・食・住のくふうをしよう。生活の中に、音楽や美術などを生かしてゆこう」と宣言しており、これはまさに慧眼というべきでしょう。

ただし半世紀前と現在とでは状況が異なっていることにも注意しなければなりません。実際、1970–80 年代以降の、いわゆるポストモダンの時代には再び芸術を政治、経済、宗教、民族、性差など私たちの生活世界のあらゆる場面に結びつけるさまざまな試みがなされています。もちろん現在でも美術館やコンサートホールで鑑賞される「美術」や「音楽」は私たちにとってかけが

えのないものですが、現代の芸術は多様化と流動化が著しく、決してそうした箱の中にだけ収まるものではありません。それらは、いわゆる参加型のアートであったり、アートプロジェクトであったり、あるいはアートであるとも気づかれないまま、私たちの生活の中に広く、深く浸透していて、私たちに生きることの喜びと豊かさを与えてくれているのです。

ちなみに、日本語は大変便利な言語で、旧来の美術館のおける「美術」やコンサートホールでの「音楽」、劇場での「演劇」、図書館にある「文学」などに対しては「芸術」の語をあて、そこには収まりきらない、あるいは固定のジャンルには分類されえないモノやコトに対しては「アート」の語をあてて、うまく使い分けているようです。現代の私たちにとっては、「芸術」も大事であり、それと同等に「アート」も大事なのです。

さらにいえば、**「アート」とは現代の芸術現象に対してのみ使用される概念にとどまらず、より広範な、「感じ、考え、工夫する」という私たち人間に普遍的に与えられている「能力」**の意味でもあります。このアートという能力が誰にでも備わっているからこそ、私たちは美術や音楽を楽しむことができるのですが、それと同じように衣・食・住の工夫もできるし、その工夫を楽しむことができるのです。よく、私は美術や音楽が分からない、ましてや現代アートなど意味不明だという人がいます。けれども服装や料理、家具が分からない、という人は滅多にいません。なぜでしょう。それは衣・食・住のことをアートだとは思っていないからですが、しかし美術や音楽、現代アートも衣・食・住も同じアートの能力に基づいた人間の営みなのです。

もちろん、異なった文化圏の生活スタイルに対して戸惑いを覚えることはあるでしょう。しかしその文化的相違を否定する狭量な態度は明らかに過ちです。好き嫌いは別としても、私たちは多様な現代のアートに対して寛容であるべきですし、逆に**現代の多様多彩なアートは私たちにとって寛容性のレッスンとなっている、といってもよいかもしれません。この多様性に対して寛容的であることは、とりわけ価値観の多様化した現代に生きる私たちにとっての大切なことです。**私たちが他者と、あるいは社会と共感によって結びつくことができるのも、このアートという能力、そして自らとは異なっているものに対する寛容性あってのことなのです。このことは芸術の日常性への浸透という課題にとって極めて重要な前提となりますが、問題は私たちがこのアートという自身の能力を未だ十分に自覚していない、ということです。

3.　創造性について

同様に「創造性」も私たちに備わっている基本的能力のひとつに他ならないのですが、「アート」以上に、私たちはそれに対して無自覚です。創造性は、「感じ、考え、工夫する」アートの能力の、とくに「工夫する」側面だと考えられます。神と違って人間は無から有を創造することはできません。**どんなに独創的な発明・発見も何度もトライ・アンド・エラーを繰り返し、経験を積み、さまざま角度から検討を加え、そこにいくつかの幸運な偶然が重なって実現するものです。大事なことは結果ではなく、この過程全体が創造性なのだということ**であり、実際、私たちは日々、その小さな工夫の積み重ねを実践しているのです。

ところが近代の「天才」概念によって、結果を伴った創造性を遺憾なく発揮しうる人物は天から特別な才能を与えられた個人だけであって、凡庸な大多数の人間は創造性の恩恵に恵まれていないと思い込まされてしまいました。しかし古代ギリシアの時代には、幸運にも「霊感」を与えてくれるミューズの女神は、個人の中に住み着いているのではなく、誰彼ともなく気まぐれに息を吹きかけては、かの人を創造性豊かな芸術家として活躍させたといいます。もちろんこれは古

代の神話的な説明に過ぎませんが、私たちが心すべきことは、ミューズが息を吹きかけてくる、いつとも知れないその時に、それを受け止める十分な準備ができているか、ということです。しかも、ちょうどこの円卓会議がよい例となりますが、**今日、創造性は一人の孤独な才能によって発揮されるというよりも、むしろ多様なもの同士が互いに刺激し合い、自由闊達にさまざまなアイデアを出し合い、情報を共有し合う場においてこそ最もよく発揮されるのです。したがって、そうした場を、さまざまなレベルで常に用意しておくことが必要になります。**

札幌市は平成18年に行われた「創造都市さっぽろ（sapporo ideas city）宣言」で「創造性に富む市民が暮らし、外部との交流によって生み出された知恵が新しい産業や文化を育み、新しいコト、モノ、情報を絶えず発信していく街」を目指す意思を明らかにしました。そして平成25年には、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）創造都市ネットワークへのメディアアーツ分野での加盟が認定されました。ここでいわれる「創造都市」も上記の私たちの普遍的な創造性の能力に根ざして初めて可能になるもので、狭い意味での文化芸術のみならず、都市空間整備、環境、教育、福祉、経済・産業、行財政など、広範囲にわたり、かつ長期的な視野に立っての指針となるものでしょう。またメディアアーツ関係では、今年度新たに5都市が創造都市ネットワークに登録されたようです。つまり札幌は既にネットワークでは先輩になったわけで、今後ますますネットワークのメリットの活用できるようになるでしょう。しかし私たちには未だ「創造都市」の市民であることの実感がありません。札幌が今後どのように変わっていくのかの実態も見えてきません。**「創造都市さっぽろ」の実質化が今後の札幌市の大きな課題となるに違いありません。今期の私たちの円卓会議も理念的にはこの「創造都市さっぽろの実質化」という点に帰着し、そのための具体的方策をさまざまに検討しました。**

またメディアアーツの分野の一層の発展が望まれるところですが、このメディアアーツに関して必ずしも共通の理解がなされているわけでもないように思われます。メディアとは送り手のメッセージを受け手へと伝えるための媒介物一般を意味します。芸術に関していえば、絵の具は画家にとってのメディアであり、文字は文筆家にとってのメディアです。では旧来の絵画や小説がメディアアーツなのかといえば、余りそのようには認識されていません。一般的にはビデオやテレビ、ラジオなどの電波メディアや、コンピュータやインターネットなどの電子メディア、また複数のメディアを組み合わせて行う表現活動であると考えられています。それらは送り手と受け手との双方向性、作品の物質性よりもそれの体験を重視することなどを特徴とし、商業ベースで成り立つものから純粋なアートに至るまで、その性格も一様ではありません。

しかしメディアアーツとは何かを厳密に規定することは、それほど重要なことではありません。むしろ**メディアアーツによって私たちに何がもたらされるかが問題**なのです。例えば、活字印刷というメディアは知識の普及にとって決定的な影響を与えました。写真というメディアは映像の記憶を可能にしました。ビデオというメディアによって私たちは時間を自由に編集することができるようになりました。メディア研究の泰斗、マーシャル・マクルーハンはあらゆるメディアは人間の機能の拡張であり、メディアは人間が作り出すものであるけれども、いったんメディアが作り出されれば、逆に人間の知覚や認識はそのメディアによって決定的な影響を受けることを明らかにしました。それは決して好ましい影響だけではないことにも注意しましょう。メディアを操作していた人間が、逆にメディアに操作されてしまうことは容易に想像がつきますし、事実、それが重大な結果をもたらす事態も起こっています。したがって、**札幌がメディアアーツをひとつの推進力として今後、「創造都市」として発展してゆく際に、メディアがブラックボックス化**

しないよう、常にその情報をオープンにしておく必要があります。

4. ふたつの提言

では、芸術や創造性が決して人ごとではなく、私たち自身の問題であるとして、それを楽しみ、それを活用し、それと共に生活するためにはどうすればよいのでしょう。つまり「創造都市さっぽろ」が実感できるようになるためにはどうすればよいのでしょう。以下、これまで議論してきたことを2点にまとめ、今回の私たち円卓会議の提言といたします。

4.1. 「さっぽろアート」のブランド化

札幌市では、今年度初めての国際芸術祭SIAF2014を開催しました。観客動員数や経済効果といった数値目標を達成したという点では評価できますし、市役所の担当部局の奮闘ぶりは実に賞賛に値します。しかしSIAFが「創造都市さっぽろ」の象徴的イベントとして実施されたとしても、先にも述べたとおり、文化芸術を中心にして、あらゆる分野で人とモノとコトと情報の好循環をもたらす「創造都市」はまだ十分に実質化するには至っていません。なによりもSIAFが市民に根づき、親しまれ、成熟するためにはまだまだ長い年月が必要です。

ただSIAF以外にも札幌にはさまざまな芸術的コンテンツがあります。PMF、シティ・ジャズ、札幌演劇シーズン、アートステージ、雪まつり、ライラックまつり、花フェスタ、カルチャー・ナイト、オータムフェスト、国際短編映画祭、菊まつり、ホワイトイルミネーション、ミュンヘン・クリスマス市など札幌市として深く関与するもの、あるいはそれ以外にも民間主催で行われているものなど、数え切れないほどです。それは年中行事であり、アートとは無関係だと思われるかもしれませんが、私たちの生活に浸透し、喜びを与えてくれるものであればこそ、どれもみなアートに他なりません。

また札幌芸術の森、札幌コンサートホールKitara、教育文化会館、市民ギャラリー、500m美術館、モエレ沼公園、札幌ドーム、チ・カ・ホ、生涯学習センターちえりあ、各地区センター、さらに芸術文化の館とそれに代わる市民交流複合施設など、ハード面で十分だとはいえないまでも、他市と比べて決して見劣りしているわけではありません。また市内には活発に活動しているギャラリーやホールなどもたくさんあります。

ただそうした数多くのアートイベントや施設の運営が、それぞれの実行委員会や縦割りの組織に個別にゆだねられてしまい、相互に連携することがありません。もちろんそれぞれの開催の趣旨や目的、経緯、実施の母体が異なり、その多様性は最大限に尊重され、個々のコンテンツがいっそう充実することが必要です。**しかしそれらが単発に終わらず、相乗効果を生み出すことも必要です。そこで創造都市としての札幌が1年を通して多彩なアートイベントを開催していることを特徴づけるために、それらを「さっぽろアート」として共通化、ブランド化することを提言します。それは同時に「アートの都市としての札幌のブランド化」でもあります。**

SIAF 開催中には「アートしてる？」のコピーで明るく楽しいポスターが各所に張り出されました。「さっぽろアート」はまさに「毎日アートしている私たちが楽しく暮らすまち、札幌」の代名詞となります。例えば、「サッポロスマイル」のロゴに「さっぽろアートは面白さ第一主義」とか「アートしてる？」のコピーを添えて、各イベントのポスター、チラシ、HPなどに掲示するだけでも、アートをよりいっそう身近に感じることができるようにする、という目的の一助となるでしょう。

4.2.　アート情報のインフラ整備

SIAF が次回の開催に向けて大きく改善しなければならないことは、広報や営業活動が十分に行き届かなかった点です。確かに第１回目で、広報や営業のノウハウを持っていなかったということもあるでしょうが、そもそもアート情報を伝えるためのチャンネルないしはインフラが札幌市には整備されていません。そのために、アート情報が必要なときに、必要な人に確実に届いていないというのが実情です。

確かに地下鉄大通駅近くの「観光文化情報ステーション」には多くのイベント情報が集まり、またウェブでもその情報を確認することができます。紙媒体では広報さっぽろを通じて折々に知ることはできます。また各イベントや施設毎に発行しているチラシは溢れるほどあります。しかしそのどれも不特定多数の人に向けてただ一方的に情報を流しているだけで、必要な人に届けているわけではありません。そこで、**さっぽろアート情報の案内人（さっぽろアート・コンシエルジュ SAC）を組織することを提言します。**その機能は以下の多岐にわたることが想定されます。

① **編集**：SAC は「さっぽろアートは、驚き・発見・泣き・笑い―面白さ第一主義」をキャッチフレーズに、アート情報誌を編集発行します。これは、音楽・演劇・美術・映画など多様なジャンルのスケジュールの掲載はもちろんのこと、単に網羅的に陥ることなく、アート情報を整理し、作品の観どころ、聴きどころ、インタビュー、作家・作品解説、批評、エッセイ、また市内のギャラリーの紹介、ボランティア通信などを掲載する、「さっぽろアート」の総合情報誌となるもので、後述の「さっぽろアート会員」に送付します。紙媒体版とは別に WEB 版や SNS 版も作り、会員の選択可能性を増やすことが望ましいでしょう。

② **取材**：SAC は情報が集まってくるのを待つのではなく、自らアートの現場に出かけて「さっぽろアート」の視点で情報の収集を行います。

③ **企画**：SAC は、アートと観光、食、プロスポーツなど多様な分野と連携し、また SAC 独自にも参加型のアートプロジェクトを企画運営し、告知するとともに、その特集記事を掲載します。とくに年代を絞る、親子限定にするなどして、特徴あるプロジェクトを組むことが関心を呼ぶことでしょう。「さっぽろアート会員」にはそれらのアートプロジェクトに優先的に参加できるような特典を与えます。

④ **育成**：SAC は、現在個別に活動している各種のアート関係のボランティア組織やその連合協議団体と連携して、あるいは意欲あるボランティアを募集して、「さっぽろアート」の取材や解説、企画の中心的な担い手となる人材を育成します。その土壌のなかからやがて、アートのディレクション、キュレーション、マネジメントなどに長けた有能な人材が育つことが期待されます。

⑤ **解説**：とりつきにくいと思われる作品にも、ひとこと現場で説明を加えることによって、たちどころに疑問が解消する場合があります。SAC は作品と鑑賞者との媒介者として、フェイス・トゥー・フェイスの解説を行います。

⑥ **批評**：「さっぽろアート」のクオリティーを保つためには、作品の評価が不可欠です。SAC は健全な批評活動によって、作家の成長を促します。

⑦ **相談**：SAC は、市民からのアートに関する問い合わせや、アートを活用した企業活動についての相談窓口になります。さらに、現代社会の諸問題（放置自転車、ながらスマホ、ゴミ出し、いじめ、買い物困難地区、除雪トラブル、少子高齢化…）などに対するアート的

な解決をテーマにしたコンペを実施するなどして、長期的視点でアートの社会への浸透化を図るコンサルタント的役割を果たします。

⑧ **営業**：各種アマチュア団体、愛好家、学生、団体、企業に働きかけて、「さっぽろアート会員」を募ります。統計的には芸術に強い関心を持っているのは人口の 4 パーセント程度といわれます。それゆえまずは 10 万人の会員数を目標に、会費は無料とし、定期的にアート情報誌を送付します。ただ理想的には、むしろ芸術に対して無関心な人たちにこそ、目を向けるべきかもしれません。北海道新聞社の「ぶんぶんクラブ」には 40 万人以上の会員登録があるそうですから、協賛企業や各種団体の参加を得て、各種会員特典を増やし、会員であることのメリットを実感できるようにすれば、より大勢の会員を集められるでしょう。また札幌観光文化情報センターにプレイガイド機能を持たせて、会員には早期チケット予約特典を与えるなどして、チケットの販売力を強化し、従来、主催団体が業者に支払っていた手数料を SAC 活動の原資の一部とします。

5. 媒介から越境へ

以上、「さっぽろアート・コンシエルジュ SAC」の業務となると思われるものを列挙しました。直ちにその活動を始めるべきであると考えますが、将来的には、市民複合交流施設に設置が構想されているアートセンターの主要な業務のひとつとなることでしょう。ただ、危惧されるのは、新設される市民複合交流施設が既存の諸施設と同様に縦割りの管理運営となってしまうことです。この名称はもちろんまだ仮称ですが、その目指すところをあらわしているとすると、「複合」は施設としてホールや図書館、スタジオ、アートセンターなどの多様な機能を持っているという意味に解されます。では「交流」とはなんでしょうか。市民がオープンで自由闊達な議論を交わす場、さまざまな立場の人が情報を交換する場、従来は無関係であった者同士が出会う場、異なる世代、異なる業種の交わりによって思いもかけない化学反応を起こす場、そのような場として「創造都市さっぽろ」のまさに拠点施設となることを目指し、「交流」という言葉が使われているのでしょう。そうであれば**この市民複合交流施設は、縦割りの運営で相互に連携し合うことのほとんどない既存施設を横断的あるいは越境的に結びつけ、新たな「さっぽろアート」を生み出す、そのような施設間の「交流」の場**でなければなりません。

今期の円卓会議では、ハード的には市民交流複合施設が、ソフト的にはアートセンターがこのような横断的・越境的業務の中枢となり、アート・コンシエルジュが仲介者としてその具体的な業務の担い手となる、という構図を描きました。しかし**SAC が待ちの姿勢ではなく、能動的に自ら動けば動くほど、単なる仲介者ではなく、越境者とならざるをえず、またそうなることを大いに期待しているわけですが、こうした越境は決して容易ではありません。なぜなら、これまで別の施設が担っていた業務にまで踏み込むこととなり、そこには相当の軋轢の起こることが創造されるからです。そのため、SAC が存分に活動するためには、この施設の長、あるいはアートセンターの長に強いリーダーシップを発揮していただく必要があるでしょう。**

おわりに

以上、「芸術」や「創造性」に対する意識的・無意識的バリアーを可能な限り取り除き、私たちの日常性を芸術化するために、「さっぽろアートのブランド化」＝「アートの都市としての札幌のブランド化」して、私たち自身が日々、驚き・発見・泣き・笑いにみちた暮らしができるこ

と、またアート情報を必要としている人に対して確実に届けられるようなインフラの整備＝「さっぽろアート・コンシエルジュ」を組織すること、を提言いたします。そのことは同時に、私たちの札幌市民の経済活動や文化活動を活性化させ、日常性を豊かにし、現在私たちの抱えている諸問題への解決の道筋をつけるという「創造都市さっぽろ」の実質化への道筋ともなるはずです。

今回、札幌文化芸術円卓会議という創造的な議論の場に参加させていただいたことは、委員一同の喜びであり、また誇りでもあります。関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成 26 年 12 月 24 日

平成 25／26 年度　札幌文化芸術円卓会議委員
石川　伸一
尾崎　要
北村　清彦
清水　朋子
鈴木　瑠惟夏
冨田　哲司
南　聡
山田　修市
尹　美成